人形

二曲三体之次第、至花道加式誌云共、見体目前不有、其風難証見依、人形之絵図移、髄体露也。

　三体之風姿、意中之従景見風所作、各各風名付。能能見得乄、分明有主風之芸体可至物也。

　亦、三体之人形、正見体能能学為、裸絵露也。咸見明乄、風名之心可習得也。

二曲三体の次第、至花道に詳しく誌すと云へども、見体目前に有らざれば、その風、証見し難きによつて、人形の絵図に移し、髄体を露はすなり。

三体の風姿、意中の景より見風をなす所、おのおの風名を付けたり。よくよく見得して、分明に有主風の芸体に至るべき物なり。

また、三体の人形、正見体をよくよく学ばんがため、裸絵に露はすなり。ことごとく見明して、風名の心を習得すべきなり。

一、児姿遊舞　二曲之本風　　　一、老体・老舞　三体之初

一、女体・女舞　　　　　　　　一、軍体

一、砕動風鬼　　　　　　　　　一、力動風鬼

一、天女　　　　　　　　　　　一、砕動之足踏

　「一華開天下春也」云云。亦、「難波津に咲くや木の花冬ごもり今は春べと咲くや木の花」云り。

　以梅花式年之為初花。然者、二曲者児姿遊風之初花成故、梅花幽曲之風見為。二曲より、三体、足踏生曲に至まで、連華風色を露也。能能可為見得。

　　　　　二曲之人形

童舞　【下に図あり】

至花道に云、「最初児姿幽風者三体に残り、三体之用風者万曲之成生景」云。児姿者幽玄之本風也。其態者舞歌也。此二曲を能能学得しぬれば、舞歌一心一風になりて、安久長曲之達人と成べし。其後、児姿を三体にうつして二曲をなせば、をのづから、幽玄之見風、三体にあらはるべし。三体を児姿の間しばらくなさずして、児姿を三体に残す事、深手立也。ただ、最初の児姿二曲を習得して、長久之有主風に安得するゆへに、三体にも残り、万曲之生景にも成也。

三体之人形

【上段に】

老体

【図あり】

閑心遠目

【図の下に】

是者、衣裳をととのへてよかるべき、その髄体也。此人体を能能心見して、立ふるまうべし。花鏡云「先其物能成、去其態能似」。是に有り。忘るべからず。

【上段に】

老舞

【図あり】

老尼・老女、同。神差、閑全之用風出所。

【図の下に】

此風、ことに大事也。体者閑全にて、遊風をなす所、老木花之開如。閑心を舞風に連続可為。

【上段に】

女体

【図あり】

体心捨力

【図の下に】

心を体にして力を捨つる宛てがひ、能能可為心得。物まねの第一大事、是にあり。幽玄之根本風とも可申也。返返、身体を不可忘。

【上段に】

女舞

【図あり】

幽玄嬋娟由懸出所

【図の下に】

女体之舞、ことに上風にて、幽玄妙体之遠見たり。児姿・二曲之見風、三体之内にも、以女体上果とす。心体力捨を忘れずして、舞曲之風姿に心連可為。当芸第一之上曲なり。舞歌一心妙得之感風、此幽曲に有り。

【上段に】

軍体

【図あり】

体力砕心

【図の下に】

是者、軍体ながら、寵景之見風残ば、児姿二曲の残花なるべし。力を体にして心を砕く宛てがい、能能心得可為。人形の心体くはしく見明可有也。

三体之人形、已上。自是身動足踏生曲移。

【上段に】

砕動風

【図あり】

形鬼心人

身動足踏生曲出所

【図の下に】

此砕動風、形は鬼なれ共、心は人なるがゆへに、身に力をさのみ持たずして立ふるまへば、はたらき細やかに砕くる也。心身に力を入ずして、身の軽くなる所、則砕動之人体也。惣じて、はたらきと申は、此砕動之風を根体として、老若・童男・狂女などにも、事によりて砕動之心根可有。花鏡云、「身強動足宥踏、足強踏身宥動」云。

【上段に】

力動風

【図あり】

勢形心鬼

【図の下に】

是は、力を体にしてはたらく風なれば、品あるべからず。心も鬼なれば、いづれもいかつの見風にて、面白きよそほひ少なし。然共、曲風を重ね、風体を尽くしたる急風に一見すれば、目を驚かし、心を動かす一興あり。さるほどに、再風あるべからず。可心得。

【上段に】

天女舞

【図あり】

乗楽心

【図の下に】

天女之舞、曲風を大かうに宛てがひて、五体に心力を入満して、舞を舞い、舞に舞はれて、浅深をあらはし、花鳥之春風に飛随するがごとく、妙風幽曲之遠見を成て、皮肉骨を万体に風合連曲可為。返返、大に舞也。能能稽古習学可有也。

　一、天女之遊舞、是者、不有人風、三体之可外。然共、女体之風也。遊楽之大舞なれば、大方を心得て、人芸之風に引きなさん事、子細不可有。

凡、天人之舞、五体心身を不残、以正力体成曲風遊風なれば、稽古習道之本学也。

序・破・急に五段あり。序一段、破三段、急一段なり。然共、破序急延と舞事有。折によりての便風也。順略と名付く。相伝可有。

　　当流之砕動一動之足数之分

　ひとつびやうし　　ふたつびやうし　　みつびやうし　　　ひろいびやうし

一拍子　―　二拍子　―　三拍子　―　拾拍子　―　二　―　二　―　二　―　一　―

足音たん　　　　　たんた　　　　　　たんたたん　　　　とつとつとつとつ

　　　　　　　　　もろいり　　　ぬすあし　　　かさねびやうし　　かえりあし　　　さそく　　　　　うそく　　　　みだれあし

一　―　一　脞熬　―　盗足　―　重拍子　―　還足　―　左足　―　右足　―　乱足

　　　　　　　　　ほろほ　　　　足をぬく也　たたんたたんとたんた　左かえり　　　ひだりをふむ　　みぎりをふむ　はらは

　　　よつびやうし 　　たんたたた

―　四拍子　　亦四拍子有り

たんたたんた

一拍子より脞熬までは、前へ行足也。盗足よりは、右の方え身を折りて、大輪に右の後え廻りて、重拍子からは、舞台の右の方え行て、還足踏みて、さて乱足の次に、左足・右足に、左右え身をきぶくつかいて、四つ拍子にて、はたらき留むるなり。加式は口伝可有。

此外、寄拍子・諸足・置足・駆足、そうじて風曲折折によて出来る拍子、数を知らず。又、無足がへり・無足まわりとて、左えかへり、右えかへる足あり。是は、足も無てかえる足なり。

膝拍子・膝還、当流になし。そうじて早態戒也。是、亡父の砕動に見えざりしゆえなり。

応永廿八年七月日